

研究論文

外国人居住者の言語レパートリーに関する研究の概観と展望 —言語管理の視点からの考察—

Overview and insights on research related to the language repertoire of foreign residents: Consideration from the view of language management

鄒 曉依(千葉大学, 人文社会科学研究科特別研究員)
Xiaoyi ZOU (Chiba University,
Graduate school of Humanities and Social Sciences)

Abstract

The Japanese use as a second language, are involved and received a great influence by many factors. In particular, in the case of residents who have long-term stay in Japan, not only the factors of language learning, but also their will about the migration and their contact experience are important factors too. Therefore, when we pay attention only to the language, many phenomena would not be elucidated. It is necessary to consider the language use of foreign residents from a more integrated viewpoint.

In this paper, I will present an overview of previous research related to language use of foreign residents in Japan, and present a new approach and framework adapted for the purpose of studying foreign residents' language repertoire. Then, I will introduce a research method, which incorporates several ways to collect synchronic-diachronic data.

1. はじめに

国際的な移動が頻繁になった現在, 日本には多くの外国人が様々な理由や目的で来日しており, 多様な在留資格を持って暮らしている. 法務省の統計¹によると, その中でも特に永住者や定住者など長期滞在する人が多く, その次に多いのが留学ビザを持つ人々である. 少数の公費留学生を除き, 大多数の私費留学生は卒業後, もちろん帰国する人も多いが, 就職または結婚などを経て永住や日本帰化へ移行する人が増加しており, 日本滞在の長期化または定住の傾向を示している(陳 2003:236, 田嶋 2010:55). さらに, 家族滞在や日本人の配偶者の人数も多く, 10 万人以上を占めている. つまり, 日本に滞在している外国人のうち, 長期滞在している人, または長期滞在できる資格を持っている人がとりわけ多くを占めていることになる.

長期滞在している外国人のうち, 私費留学や家族滞在で来日した居住者は, 自分の意志で滞日中の仕事や生活様式, ネットワークを選択することができる. 日本語習得や日本人とのネットワーク作りに熱心に取り組んで, 日本人とほぼ変わらない日本語を話して生活している居住者がいる一方で, 長く滞在しているにも関わらず, 最低限の日本語を使用して, 必要な場面のみにおいて日本人と接触する居住者もいる. これらの居住者を見ると, 日本人ネットワークへの参加の度合いや日本語習得の意欲が, 居住者の日本語使用上の個人差にも関連する可能性が浮かび上がってくる.

ところで, 留学生または日本語学習者である段階では, 言語習得や文化適応などの面において様々な問題を抱えていることが明らかであるため, 社会言語学の分野および第二言語習得領域

において研究者に注目され、様々な視点からの研究が長年に渡って行われてきている。一方で、滞在が長期化して居住者になった人は、十分な日本語能力があつて日本社会への適応もできていると考えられがちで、研究対象として問題視されなくなっている。しかし、日本に10年あるいは20年の居住歴を持ち、日本の生活に適応しているように見える居住者でも、日本語の問題が存在しているという考えを持つ人も多い。特に成人してから学習を始めた場合は、習得が不完全なまま停滞してしまう(白畑等 2010)とされている。

しかし、居住者は日本人との接触経験を積み重ねることによって、自身の日本語欠如(ネウストプニー1995)に対する態度を形成していく。自覚した言語欠如が解決できると考えた場合、会話では積極的に意味交渉を実施し母語話者の訂正を求めることになる。一方、自覚した言語欠如が解決できないと考えた場合、会話では意味交渉を避けて、問題を表層化させないことになるだろう。つまり、居住者は接触経験を通して自分の言語問題に対する態度を形成し、それに基づいて言語問題を管理している。そして、このような言語問題に対する管理は次第に習慣化され、居住者に意識されなくなり、特に回避されている問題は現在の日本語使用を観察するだけでは解明できない。そのため、外国人居住者の言語態度の形成に影響した出来事をライフヒストリー調査から探り、習慣的な言語使用及び習慣化された言語管理の分析を通して、接触場面における日本語使用の解釈を試みる必要があると言えよう。

このように、外国人居住者の言語問題を対象とした研究においては、単に言語使用者という視点から日本語使用に注目するのみでは解明できないことが多い。そのため、外国人居住者を社会の一構成員として見るとともに、ネットワークへの参加や接触経験など、言語使用者を取り巻く言語環境や社会環境をも視野に入れる必要が生じてきた。そこで、本稿では、これまでの先行研究を概観し、外国人居住者の言語レパトリー研究に関する研究方法や分析の枠組みについて論じてみたい。

2. 先行研究の意義と問題点

2.1 移民に関する研究

在日外国人に関する研究は、社会学や心理学などの領域で盛んに行われてきた。移民や帰国子女の適応問題を扱う研究(林 1987, 江淵 1988 など)や、留学生や短期滞在者を対象とする研究(長井 1988, 井上・伊藤 1997)などがあり、長期滞在者の研究として辻本(1998), 中原(2003)などがある。また、外国人労働者を対象に、その増加の実態と社会的背景を明らかにした高木(2009)などもある。日本に住む中国人移民についても、文化適応(福岡・辻山 1991), ネットワーク(中野 2003, 王・周 2006)やアイデンティティ(過 1999, 陳 2001, 殷 2005)のほか、歴史的な変容(小田 2010)やコミュニティ(譚・劉 2008)に関する研究など、様々な角度から研究されてきた。特に、1972年以前に来日した旧華僑とその後に来日した新華僑を比較しながら述べるもの(陳 2003, 莫 1993, 伊藤 1996, 白岩 2003, 広田 2003)が多く見られる。2000年代の在日中国人についても、来日人数、居住地域、在留資格に関する統計的な研究(千葉 2010)もなされており、歴史的な変遷に言及しながら新老華僑の特徴が詳細に検討されている。また、当事者の声から様々な在日中国人の実態を描き出し、日中の相互理解を図ろうとしているもの(江崎・森口 1996, 共同通信社取材班 2011, 吉田 2009, 古川 2009 など)も多くある。

ニューカマーズを中心に上げた研究も行われており、主に生活様式・居住環境についてアンケート及びインタビューをした奥田・鈴木(2001)がある。奥田・鈴木(2001)では、来日10年目を迎えるアジア系外国人居住者について様々な面からまとめており、日本での生活の意味や今後の定住の予定についても述べられている。江・山下(2005)は、ある公共住宅団地に華人ニューカ

マーが集住化することに注目し、集住化の要因及び生活実態を考察した。山下(2010)は新華僑の生活様式を、来日当時の中国の社会状況や、個人の志向などに関連させて理解しようとしている。そして、田嶋(2010)は、国際移動の視点から、送り出し社会である中国の構造変容と、受け入れ社会である日本の構造変容を視野に入れつつ、中国人居住者の生活と意識について分析した。

一方、日本に来た就学生や私費留学生は2年以上滞在する人が多く、卒業後も日本で就職し、滞在し続けているため、移民の一種であると考えられており、中国人留学生の歴史的な変遷(李・田淵 1997)やネットワーク(崔・加藤 2013)に関する研究が行われている。日本留学の経緯やその後の生活については段(2003)や千葉(2010)などが詳細に述べている。千葉(2010)は就学で来日した人は出稼ぎの性格が強く、渡航するためにした借金を返済しなければならないし、為替のために中国より何倍も高い給料が得られるため、「高給を得ること」を目的として在留していると述べている。日本で働く動機については、中国社会の就職難がある一方、日本の不景気によって多言語話者に対するニーズが生じたため、中国人留学生が就職するチャンスが増えたことも挙げられた(千葉 2010:59)。国際的な移動の経緯が居住者の言語生活に影響を与えることに注目して、中国人私費留学生の場合には、来日以前から海外とのつながりを持っていることが移動の契機となり、さらに来日後の就労や生活適応のあらゆる面に一定の影響を与えていることを指摘している研究もある(田嶋 2010)。そして、山下(2010)によれば、新華僑は来日前の生活状態に不満を持ち、日本に行くことによってそれまでの人生をリセットしようとしているという。そして、彼らが借金をして留学に来ていること、さらに来日することによってもたらされた経済的な利点についても詳述されている。さらに、このような新華僑が、数年間の悪戦苦闘の結果、進学や起業をすることによって、だんだん日本社会に定着していった過程が描かれている。これらの研究を通して近年の私費留学生の来日目的が多様化していることが分かる。

また、日本人と国際結婚した中国人居住者について、過(2003)は国際結婚の歴史的な変遷や今日の実情などに焦点を当てて述べている。塞漢卓娜(2011)では、「行為者」として中国人嫁が日本の家族や地域へ適応していく過程を社会学・心理学の視点から分析している。塞漢卓娜(2011:22)は日本の農村部に住むアジア系外国人女性は、ジェンダーとエスニシティの関係以外に、日本の都市ー農村という不均衡な関係の下に置かれ、諸々の力関係の末端に位置づけられていると述べている。そして、そのような「多重に周辺化」されている環境で暮らす中国人女性のライフストーリーを分析しており、「外国人嫁」が自身の外来性(Neustupný1985, フェアブラザー2003)を否定的に評価していることが分かる。そして、村岡(2002)では中国人妻が中国姓を名乗ることによって、自分の外来性を意識的に表示し、母語話者の期待の変更を求めようとするなど外来性を積極的に利用していることも分かる。

これらの研究を通して、居住者の来日にまつわる社会的・個人的な状況や来日後の生活及び今後の定住傾向など、全体的な様子を把握することができる。しかし、いずれの研究も生活環境や異文化に焦点を当てており、日本語使用に関する問題は対象とされていない。

2.2 在日外国人の言語問題に関する研究

まず、長期定住外国人の日本語使用に関する研究には谷口(1998)、佐野(2007, 2008)、野山(2013)などがある。谷口(1998)では、定住外国人の初期レベルの話者にとっては、動詞の使用が困難であり、名詞使用が多いと報告されている。佐野の研究は、日本定住期間が長いにも関わらず、日本語によるコミュニケーションに困難を感じているブラジル人を対象としている。その結果、名詞の使用が圧倒的に多く、名詞一語文や「名詞+は」「名詞+の+名詞」「名詞+と+名詞」の使用が多いことがわかった。動詞は頻度・異なり語ともに少なく、動詞一語文が一番多くみられる

が、これらは「分かんない」「違う」というような定型表現の使用である。「ね」の使用については、「～です」もしくは名詞に直接組み合わせる現象が見られている。そして、滞在 8 年でも *Infinite utterance organization*² 段階へ移行できず、*Basic variety* 段階で化石化してしまうが、それを克服するための「強い動機づけ」や調査対象者の背景および彼らを取り巻く環境に関する調査の必要性についても言及している。

野山(2013)では、5 年間に渡り同一対象者に対して OPI 調査を実施した結果、初級から中級に進級した人は 1 人のみで、他には級レベルを跨いで伸びた人がいないことがわかった。つまり、1 年目が中級の人は 5 年目も中級のままで、1 年目が上級の人は 5 年後もやはり上級のままということである。そして、会話の分析を通して、定住者の日本語には方言の使用、言い切らない/言い切れない発話文の頻出、直接話法での引用、発音の化石化とスタイルの習慣化などの特徴があったと述べている。

次に、在日韓国・朝鮮人の言語使用の全体についての研究では任(1993)、生越(1991)がある。黄(1994)や金美善(2003)、朴(2006)などは二言語の混用またはコード・スイッチングの視点から研究している。また、金由那(2006)は在日コリアン二世の韓国語学習者としての学習目的や学習意識を明らかにしたが、実際の言語使用への影響については言及しなかった。田嶋(2010)に挙げられている韓国人の事例では、共生を目指すために守るべきことは、日本語を上手に話してはいけないというルールであると当事者が述べている。つまり、非母語話者が自身の外来性を保持し、利用するように意識的に管理していることが分かるが、日本語の使用における具体的な管理行動については言及されていない。ほかに、任(2006)は日本と韓国の言語・文化の特徴から在日コリアンのコミュニケーション・スタイルを分析している。具体的な文法項目を取り上げた金智英(2006)は名詞を修飾する場合に使用された格助詞「の」に焦点を当て、3 人の在日コリアン一世の言語運用の実態を考察した。渋谷・金(1999)も在日コリアン一世の動詞使用について、語彙、ヴォイス、テンス・アスペクト、モダリティと文末詞から分析を行った。また、金庭(2003)では KY コーパスを使用し、初級から超級までの韓国語母語話者の動詞使用を観察した。

就労目的で滞日している外国人を対象とした研究には、土岐(1998)の縦断的な研究プロジェクトや、ブラジル人のスタイル切り替えを分析したナカミズ(1997)がある。ほかに、清(1998)は日本語上級レベルの在日外国人社員が抱えている言語面と心理面の困難を明らかにし、日本語能力が高いグループは困難を乗り越えようと積極的に取り組んでいることも述べている。

このように、日本に移住してきた移民の日本語については、在日コリアンを研究対象にするものが最も多く、在日中国人には特徴的な日本語変種が見いだせないために研究がそれほど多くないのではないかとすることを渋谷(2010)は述べている。

また、留学生の日本語使用を対象とした研究は多くあるが、ここでは言語習得や言語使用に影響を与える諸要素(在日年数、学習期間、言語意識、言語能力など)との関連を述べた研究に限定して紹介することにした。まず、上級レベルの留学生を対象に調査した岡崎・一二三(1995)では、滞日年数によって日本人に対する配慮がどのように変化するかを考察した。その結果、在日年数の長い者(1 年以上)からは「断定的な言い方を避ける」、「自分のことを強く主張することは避ける」、「自分の意見をストレートに言わない」、「相手の意見を強く否定することは避ける」などの配慮が挙げられている。そして、中級学習者をも対象とした一二三(2000)の研究結果によると、日本人との会話で配慮することは「正確な理解」と「距離を保つ」ことであるという。具体的には、日本人の言葉が理解できない場合は、繰り返してもらったり、何度も質問したり、言い換えてもらうなどの方略を駆使して、相手の発話を正確に理解するよう努める。また、自分の発話も誤解されないよう、正しい文法や発音、適切な言葉遣いで失礼にならないように気を配ることが

明らかにされた。

また、王(2009)は中国人留学生の言語使用に影響を与える要因とされる言語意識と言語能力を考察した。その結果、日本語に好意を持っている人は日本語を積極的に使用するが、日本語に対する難易度の認知は言語使用に影響しないことが分かった。そして、日本語能力が高い人ほど日本語を多用するなど、言語能力による影響が見られたと述べている。

趙・呉・笠原(2004)では中上級中国人学習者が抱える日本語習得の困難点として、助詞、形容詞、自他動詞、待遇表現などが挙げられている。特に自他動詞は複雑で、さらに学習者の母語による影響もあり、5、6年以上学習した人でも正しく使えない状況であるという。また、誤用があっても意味の理解にほとんど支障を与えることがないため、混乱したままでも直そうとしない日本語上級学習者は少なくない。しかし、上級学習者が誤用した場合、聞き手にとりわけ違和感を与えることになり、日本語学習上の盲点であると指摘されている。

田中(1999)は KY コーパスを利用して、英語・韓国語・中国語話者によるヴォイスの使用を調べた結果、受身表現は初級では出ないが、中級以降に現れるとしている。そして、中国語話者には受身の多用(過剰使用)の傾向があることが明らかにされた。また、馮(1993, 1994)では、中国人学習者の受動文・使役文における母語干渉を分析した結果、母語が長い間に渡って「日本語の構文文法」の学習に干渉し続けることが明らかにされた。

また、終助詞の使用に関する研究は、ナズキアン(2005)、初鹿野(1994)や、楊(2010)、船戸(2008)、何(2008)、山田(2006)など数多くある。ナズキアン(2005)では、初中級学習者にとって、終助詞の適切な使用や習得が困難であることを指摘している。何(2008)は、中国語を母語とする初級、中級、上級の学習者の「ね」を分析しており、初級から上級学習者に一貫して見られる不適切な使用について、「ね」と「よ」の機能を十分把握していないことが原因だと指摘している。また、対照研究の視点から中国語母語話者による「よ」の運用を研究した山田(2006)は、母語の影響と中国で使用された教科書の説明不足によって、中国人学習者には「よ」と「ね」の混同が見られることを指摘している。

さらに、楊(2010)では、中級・中上級の中国人留学生が滞日1年の間に日本人と交わした5回の会話を収集し、そこに見られた終助詞を分析した。その結果、滞日期間が長くなるにつれ、終助詞の使用率が上がるといった傾向は見られないという。

長期滞在している中国人話者の助詞の習得を調査した研究には、吉田・白畑(2013)、木村(2009)がある。特に、滞日期間が長く日本語使用歴の長い中国人は、誤用を訂正される機会を失い、そのまま化石化してしまう危険性があると木村(2009)は指摘している。

以上のように、多くの研究は在日外国人の日本語使用に着目しており、特に滞日期間や言語能力などの要素が言語習得との関連を述べている。さらに、長期滞日外国人や上級話者によく見られる不適切な使用や化石化しやすい言語項目も指摘されている。しかし、来日時期や来日の理由、ネットワークの言語環境、母語や母方言など、言語を取り巻く事情が非常に複雑なため、外国人居住者の言語能力や言語運用の実態には解明されていない点が多いと真田(2006: 127)は述べている。

2.3 接触場面における外国人居住者の言語管理

内的場面とは対照的に接触場面(ネウストプニー1981)では、非母語話者が持っている外来性が、社会的規範または母語話者の規範に逸脱することによって、母語話者に留意されることがある。そして、留意された逸脱に対して評価を与え、評価の肯否によって調整行動を実施するかどうかを決める。このような一連の行動をネウストプニー(1995)では管理プロセスと呼んでいる。

日本に滞在している外国人居住者の言語管理研究では、韓国人や中国人を対象とするものが多い。まず、韓国人を対象とする研究としては、キム(2008)や今(2011,2012)、高(2014)などがある。中国人話者を対象とした研究には、不一致応答に対する言語管理を分析した王(2006)や楊(2009,2010)、意味伝達問題を解決するための調整ストラテジーを分析した方(2010)がある。また、人称詞の言語管理(王 2009)や動詞使用に関する言語管理(鄒 2012,2014)に着目した研究も見られる。キム(2008)では、超上級韓国人日本語学習者が表層化段階では誤用を生み出さないように事前調整を行っていることを述べている。同様な事前調整は中国人居住者にも行われていることが鄒(2010,2014)で明らかにされた。ほかに、非漢字圏外国人居住者の書き言葉使用に対する管理を研究した金子(2006)もある。

2.4 まとめ

以上のように、日本に長期滞在している外国人居住者についての研究を概観したが、文化適応やアイデンティティなどを扱うものが多く、生活環境やネットワークに関する問題に集中している。言語問題についての研究も学習者段階を対象とした研究は多くあるが、生活者として実際に参加した接触場面での言語使用や言語管理に関する研究はまだ少なく、解明されていないことが大いにあると言えよう。そこで、外国人居住者については、単なる言語使用者として扱うのではなく、移住者でもあるという特性を考慮に加えて個人の言語レパートリーの形成という縦断的な視点からも考える必要がある。そのため、外国人居住者の言語使用に関する研究においては、新たな研究方法や分析手法などを考案する必要があると言えよう。

3. 外国人居住者の言語レパートリー研究の枠組み

言語レパートリーは、インターアクションにおいて使用されている言語形態の全体を示す概念として Gumperz(1964:137)で紹介されていた。最近の接触場面研究では、言語レパートリーは自動的または自然に習得されるものではなく、話者がそれまで参加した様々な接触場面を通して行った言語管理の軌道として捉えることができる(Muraoka,Fan,Ko2013)と主張されている。村岡(2010)では接触場面において見られる言語管理には、当該場面に限られたミクロな言語管理と、個人の言語態度や言語意識までが包摂される接触場面に向かう管理があると指摘されている。そして、接触場面に向かう管理の一部は、接触場面における管理プロセスに適用される規範や管理パターンとして選択される場合がある。また、接触場面に向かう管理は習慣化された「言語に対する行動(behavior towards language, Fishman 1972)」であるとして、静的で固定的である言語態度や言語意識の概念と区別している。接触場面に向かう管理は、ディスコースに限られない日常的な言語使用の意識や信条のようなものであると村岡(2010)は説明している。このような、場面との直接的な関連を離れて接触場面に向かう管理を捉えようとする場合には、Nekvapil(2003)の言語バイオグラフィーが採用できると村岡(2010)は述べている。それは、語り手である調査協力者のライフストーリーから、言語習得や言語使用についての説明を得ることで、協力者の言語生活の社会的・通時的な文脈を考慮することが可能になり、現在の言語使用の来歴を探ることができるという方法論である。語りの内容には、調査協力者の生い立ちや言語環境も含まれる。実際に、今(2011)では、言語バイオグラフィーの分析を通して韓国人居住者の日本語使用の来歴を探り、教育、仕事、交友の3つの領域(domain)から居住者の現在の言語環境を考察している。

長期滞日している外国人居住者は様々なネットワーク領域を構築し、多くの接触場面を経験してきたため、そのような接触経験は居住者の言語レパートリーの構築に大いに影響していると考えられる。そのため、居住者の来日前から現在までのライフストーリーという通時的な文脈から、

接触経験の中で形成された言語態度を明らかにする必要がある。また、日本に長期滞在している外国人居住者の日本語使用は、学習動機や言語適性、生活環境、学習ストラテジーなど第2言語習得に関わる要因にも影響されており、居住者を取り巻く環境に関連させて研究する必要がある。特に来日の目的及び日本語の学習動機は、日本語の習得意欲に深く関わっており、次第に居住者の日本語使用において差を生じさせると考えられる。

そして、外国人居住者は日本に長期滞在していても母語話者と同等の言語能力を習得することは困難なため、自分の言語欠如を補うために様々なストラテジーで調整を試みている。自分の言語知識を増やすこと以外にも、意図的に母語を利用する場合がある一方で、無意識的に母語に影響される場合もあると考えられる。そのため、居住者の言語使用を考察する際に、母語の影響は無視できない要素である。また、高い日本語能力が要求される場面だけでなく、日本語能力が要求されない場面に参加するといったことも考えられるため、言語ネットワークの考察も必要となる。

外国人居住者に対する研究では、社会学や社会言語学などそれぞれの領域において調査が行われているが、日本語使用には居住者を取り巻く社会環境・言語環境・言語態度など様々な要因が関係しており、それらを統合して分析する必要がある。

このような枠組みを踏まえ、鄒(2015)では、次頁の図に示したように「移動のライフストーリー」「ディスコースにおける言語管理」「習慣化された言語管理」の3つの視点から中国人居住者(Chinese residents, 以下はCRで示す)の言語レパートリーの分析を試みた。

3.1 ライフストーリーの分析

鄒(2015)では、インタビューで得られた語りをもとに、下記の3つの視点からCRのライフストーリーを整理し、言語態度(真田等1992)を抽出した。

(1) 言語ネットワークの分類

まず、日本語能力が求められないネットワークに参加している場合、言語使用をそれほど意識する必要がなく、より高いレベルへの習得意欲も低い。一方、高いレベルの日本語能力が求められるネットワークに参加している場合は、言語使用に厳しく注意し、逸脱を管理することになると予想できる。つまり、ネットワークの言語環境がCRの言語習得意欲及び言語管理の実施に深く関係していると考えられる。そこで、ファン(2008)を参考に、接触場面への参加状況に基づいてCRのグループ分けを行った。具体的には、ロメイン(1997)と今(2011)を参考に、CRが参加しているネットワークについて、①公共領域、②職場領域、③教育領域、④友人領域、⑤家庭領域の言語環境及びCRにとっての親密度から考察した。その結果、①日本人ネットワークを志向しないグループ、②限られた日本人ネットワークに参加しているグループ、③日本人ネットワークを中心に参加しているグループに分けることができた。

(2) 時間軸に沿った分類

大久保(2009: 36-37)では、語られたライフストーリーを「今までの人生」と「これからの人生」に区別している。鄒(2015)はライフストーリーの記述において大久保(2009)を参考に、CRの「今までの人生」を「①来日前の生活」と「②来日後の生活」に分け、「これからの人生」を「③定住と再移動」という3段階に分けて記述した。

(3) 移動・定住の要因の分類

移動のそれぞれの段階での語りには、CRの移動または定住に影響していた社会状況や家族、また本人に固有の事情などが語られていた。鄒(2015)ではそうした要因を抽出し、「社会的要因」「家庭要因」「個人要因」の3つに分類した。

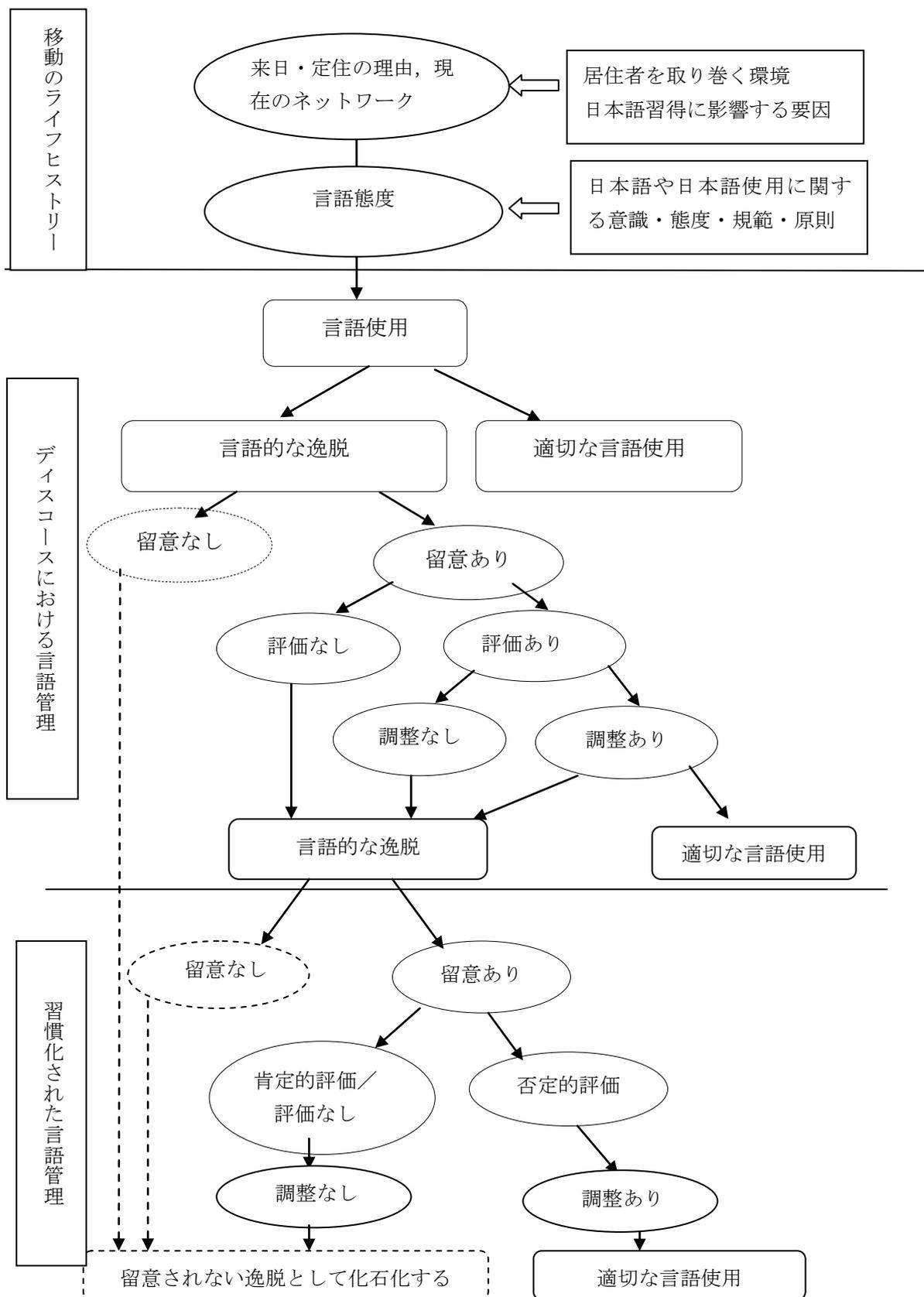


図1：分析の枠組み(郷 2015)

以上の図1のように、居住者のライフヒストリーを通して日本語習得に関わる移動の要因を分析し、日本語習得意欲に関わる要因としての学習動機や言語態度を探る。特に、居住者の日本語習得目標や、使用する際の規範意識などに注目する。

3.2 ディスコースにおける言語管理の分析

鄒(2015)では、まず、ディスコースに見られた当該場面に限られた言語管理の分析について、管理プロセスでの「留意」と「調整」の2段階を中心に分析した。以下のように、CRの言語的逸脱が留意されたかどうかによって、大きく2つに分けることができる。

(1) 留意された場合：

どのような逸脱が調整されたか、どのようなストラテジーで調整されたか。

どのような逸脱が調整されなかったか、調整されなかった理由は何か。

(2) 留意されなかった場合：

どのような逸脱が留意されなかったか、留意されなかった理由は何か。

鄒(2015)は以上の分析を通して、CR自身による言語管理について、問題解決に向かって管理される場合にはどのように調整されたか、管理されない問題にはどのような問題があるかを明らかにすることができた。

3.3 習慣化された言語管理の分析

長期滞在している外国人居住者の場合、接触経験が豊富なため、自らの言語問題について認識できているものもあり、それを習慣的に管理していることがある。そこで、鄒(2015)では、ライフヒストリーの分析から得た居住者の言語使用意識、主に日本語習得意欲や自分の言語的逸脱に対する態度などをもとに、接触場面会話のデータに見られた習慣的な管理を分析した。

習慣化された言語管理については、鄒(2015)は以下の2つの場合が見られた事例を取り上げて分析した。

(1) CRによって報告された言語態度が、ディスコースの動詞使用に反映された場合

(2) CRによって報告された言語態度が、ディスコースにおける言語管理で規範として適用された場合

以上のように、外国人居住者の日本語使用を分析する際に、ディスコースに現れた言語使用に注目するだけでは、居住者の言語使用の全体像を把握することができないと考えられよう。そのため、居住者を取り巻く様々な要因を統合して、言語使用および言語管理を共時的・通時的に分析する必要もあると言えよう。

4. 調査方法についての考察

ここでは、外国人居住者に関する先行研究において使用された調査方法をまとめ、鄒(2015)で使用された調査方法を紹介する。

4.1 先行研究における調査方法

(1) アンケート調査

社会学の研究では、外国人居住者の居住状況や生活様式を調べるために、アンケート調査が多く行われている。第二言語習得研究においても、韓国語学習者の学習目的と学習意識について調べた金(2006)や、言語意識と言語能力が言語使用に及ぼす影響を調べた王(2009)は、アンケート調査によるデータ収集を行った。それによって、調査結果のカテゴリー化がなされたり、全体的な傾向が明らかにされた。

しかし、アンケート調査では、より具体的な情報が得られないため、外国人居住者に対する聞き取り調査による質的調査が重要になるだろう。

(2) インタビュー調査

社会心理学やエスニック・アイデンティティに関する研究の場合は、アンケート調査に加えて、さらに対象者に対するインタビューが行われることもよくある。特に、外国人居住者の生活環境や世界観を理解するために、インタビュー調査は多くの研究者によって実施された。例えば、奥田・田嶋(1995)や田嶋(2010)は大規模なインタビュー調査によって、外国人居住者の現在の生活状態や日本に対する感情などを把握することができた。また、今(2009)はインターアクション・インタビューを実施し、韓国語居住者が参加しているネットワークを調べた。

(3) 参与観察

外国人居住者に関する調査で参与観察を実施した研究には賽漢卓娜(2011)がある。賽漢卓娜(2011)は、ライフストーリー法によって日本に嫁いだ中国人嫁に関するデータを集めたが、「記憶の間違いやあいまいな部分あるいは嘘やごまかし」を克服するために、インタビューに加え、住み込みによる参与観察や対象者の故郷を尋ねるなどの調査も行い、居住者の移住の経緯及び現在の生活状態を具体化できた。

(4) 会話収録

非母語話者の言語使用に関する研究では、会話収録によってデータを集める方法はよく使用される。渋谷(1997)と渋谷・金(1999)の研究は、被調査者に対する個別面接による談話を録音した。そして、特定の話題についての談話データから動詞の文法カテゴリーを分析した。しかし、渋谷(1997)でも「習得を取り巻く条件の詳細については本稿では取り上げていない」と明言している。

在日韓国人や定住ブラジル人の言語使用についての研究では、調査者が対象者にインタビューをする形や、対象者同士による会話が使用されることが多い(金 2006, 郭 2006, 佐野 2007)。今(2010,2012)や高(2014)は、外国人居住者の言語使用に注目して習慣化された言語管理についても分析の視野に入れているが、研究データはインタビューの語りであるため、居住者が普段参加する場面ではないと言えよう。今(2011)では、滞日 10 年の韓国人留学生を対象に、普段参加している研究室の日本人学生との接触場面会話を収録した。さらに、会話データのみによる分析の限界を指摘し、インタビュー調査も行い、言語態度や言語環境を調べた。

ほかに、KY コーパスを利用した金庭(2003)や田中(1999)もあるが、会話データのみを使用しており、話者による意識的な管理を扱っていない。

4.2 鄒(2015)で使用された調査方法

これまでの先行研究で使用された調査方法を参考に、鄒(2015)では以下の4つの方法を使用し、中国人居住者の日本語使用について共時的・通時的なデータを収集することを試みた。

(1) ライフヒストリーに関するインタビュー調査

石原(2008: 42)は、出稼ぎ者の異文化理解と定住の研究において、ライフヒストリー法の有効性を論じており、聞き取り調査項目の事前準備は不可欠であるが、柔軟性を持って進めていくべきであると指摘している。そこで、鄒(2015)の調査においては、時間軸に沿ってCRの移動に関わる出来事や意識などを中心にインタビューを進行させるが、CRの語りに応じて深く語ってもらうこともあり、関連する他の話題に展開することもあった。質問は来日前の生活状況から、来日の契機、来日後から今までの生活、今後の再移動の可能性について時間軸に沿って質問した。このような半構造化インタビューを実施することによって、CRの移動に関わる要因を全面的に把握しようとした。また、普段から日本語を使用する際に意識することや、日本語母語話者と接触する際に意識することについても尋ね、CRの言語態度を把握した。そして、ライフヒストリー法の分析によって、CRのライフヒストリーを類型化した上で、それぞれの言語使用の特徴を考察できると考えられる。

(2) 自然会話の収録

鄒(2015)では、居住者のより自然な会話データを収録するために、協力者に調査を依頼する際に、「日本に長期滞在している中国人居住者の日本語使用に関する調査」という大まかな目的を伝え、日常的に参加している接触場面の会話を収録してもらった。そして、実際の生活状態を把握するため、協力者に「よくある一日」の生活録音を自主的に収録するように依頼した。プライバシー上、不都合な場合を除き、会話時間や場面に関係なく、満遍なく収録してもらった。また、会話の相手に対する調査の説明やデータ公開の承諾は、調査者が作成した「調査委託書」を使って協力者に行ってもらった。調査の説明ができない突如の電話会話の場合は、相手の音声を録音していないため、協力者によって復元されたものを使用した。これによって、居住者の自然な会話データを収録できたとと言える。

(3) 内省インタビュー調査

CRの言語使用及び言語管理の過程を明らかにするため、会話終了後に当時の状況を内省してもらうことも不可欠である。そのため、会話収録後、録音データを文字化し、1週間以内にフォローアップ・インタビュー(FUI)を実施した。FUIでは、CRに自身の言語行動を内省してもらうことにより、CRが自ら行った言語管理の対象及びプロセスを明らかにしようとした。

(4) 第三者母語話者による言語的逸脱の判定

上述の3つの調査を通して外国人居住者自身が留意しなかったものは報告されることがないため、3名の第三者日本語母語話者に、文字化資料を利用して言語的逸脱のチェックを依頼した。それによって、居住者自身に留意されなかった言語的な逸脱には、どのようなものがあるかを分析することができた。

5. おわりに

日本には、多くの外国人居住者が暮らしているが、その生活実態の一部は研究や調査で明らかにされつつある状況にある。居住者の言語使用については、まだ解明されていない点が多くあるが、少しずつ研究のスポットが当てられるようになった。その中で、単なる表層化された言語表現の分析のみでは、居住者の言語使用特性を述べるにあたって十分とは言えず、居住者を取り巻く様々な要素をも考慮すべきであろう。しかし、それらを全て統合して外国人居住者の日本語使

用を分析することは極めて困難である。そこで本稿では、鄒(2015)で使用した居住者の言語使用を共時的・通時的に分析できる枠組みを提示した。今後さらに多くのデータを使用し、分析の可能性を検証する必要があるだろう。

参考文献

- 陳天璽 (2001). 華人ディアスポラ 華商のネットワークとアイデンティティ 明石書店
- 陳天璽 (2003). 中国人—日本社会と新華僑 駒井洋(編) 多文化社会への道 明石書店
- 千葉明 (2010). 日本人は誰も気づいていない在留中国人の実態 彩図社
- 崔慧璘, 加藤好崇 (2013). 短期留学生の人的ネットワークの研究: 韓国からの三人の短期留学生に対するケーススタディ 東海大学紀要 国際教育センター 3 pp.29-45
- 段躍中 (2003). 現代中国人の日本留学 明石書店
- 江淵一公 (1988). 帰国子女のインパクトと日本の教育—「帰国児を生かす教育」の視点から 社会心理学研究 3 pp.20-29 日本社会心理学会
- 江崎泰子, 森口秀志 (1996). 「在日」外国人 株式会社晶文社
- フェアブラザー・リサ (2003). 接触場面と外来性—母語話者のインターアクション管理の観点から— 千葉大学大学院博士學位論文
- 方穎琳 (2010). 接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用—意味伝達問題を解決するための達成ストラテジーを中心に 言語文化と日本語教育 39 pp.122-131 お茶ノ水女子大学日本言語文化化学研究会
- ファン・サウクエン (2008). 平成 20 年度文化庁日本語教育研究委託 外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発(生活者としての外国人)のための日本語教育事業)報告書 社団法人日本語教育学会
- 馮富榮 (1993). 日本語受動文の学習過程における母語—中国語の影響について 教育心理学研究 41 pp.388-398
- 馮富榮 (1994). 日本語使役文の学習過程における母語(中国語)の影響について 教育心理学研究 42 pp.324-333
- Fishman, J. (1972). *The sociology of language: an interdisciplinary social science approach to language in society*. Rowley, Mass: Newbury House.
- 福岡安則, 辻山ゆき子 (1991). 同化と異化のはざままで 「在日」若者世帯のアイデンティティ 葛藤新幹社
- 船戸はるな (2008). 文字チャットの学習効果及び音声会話への影響—終助詞「ね」に注目して— 2008 年度日本語教育学会秋季大会予稿集 pp.191-192
- 古川猛 (編著) (2009). 日本で活躍する在日新華僑 コロンブス叢書
- Gumperz, J.J. (1964). Linguistic and social interaction in two communities. *American Anthropologist* 66/(6/2) pp.137-53.
- 過放 (1999). 在日華僑のアイデンティティの変容: 華僑の多元的共生 東信堂
- 初鹿野阿れ (1994). 初級日本語学習者の終助詞習得に関する一考察—「ね」を中心として 言語文化と日本語教育 8 pp.14-25 お茶の水女子大学日本言語文化化学研究会
- 林春男 (1987). “Japanese American”の成立 実験社会心理学研究 27 pp.1-14 日本グループ・ダイナミックス学会
- 何桂花 (2008). 日本語教育における終助詞「ね」の習得の特徴—インタビュー形式の会話における中国語を母語とする学習者を中心に 日本語・日本文化研究 18 pp.117-126

- 一二三朋子 (2000). 日本人との会話における外国人留学生の意識的配慮の検討 東京成徳大学研究紀要 7 pp.21-28
- 広田寿子 (2003). 華僑のいま 日中の文化のはざままで 新評論
- 黄鎮杰 (1994). 在日韓国人の言語行動—コード切り替えにみられる言語体系と言語運用 日本学報 13 pp.45-63 大阪大学文学部日本学研究室
- 井上孝代,伊藤武彦 (1997). 留学生の来日 1 年目の文化受容態度と精神的健康 心理学研究 68(4) pp.298-304
- 石原昌家 (2008). 沖縄出稼ぎ者と定住—異文化接触と同化過程 新版ライフヒストリーを学ぶ人のために pp.41-71 世界思想社
- 伊藤泰郎 (1996). 関東圏における新華僑のエスニック・ビジネス 駒井洋(編) 日本のエスニック社会 明石書店
- 江衛,山下清海 (2005). 公共住宅団地における華人ニューカマーズの集住化—埼玉県川口芝園団地の事例— 人文地理学研究 29 pp.33-58
- 金庭久美子 (2003). 韓国語母語話者の動詞の使用状況 横浜国立大学留学生センター紀要 10 pp.53-66
- 金子信子 (2006). 外国人居住者による書き言葉使用場面参加のストラテジー—生活場面インタビューの事例より— 村岡英裕(編) 多文化共生社会における言語管理 接触場面の言語管理研究 vol.4 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 Vol.129 pp. 13-35
- 金智英 (2006). 在日コリアン一世の言語運用の一実態 任榮哲(編) 韓国人による日本社会言語学研究 pp.168-182 おうふう
- キム・キョンソン (2008). 韓国人超上級日本語話者の言語管理—事前調整を中心として 村岡英裕(編)言語生成と言語管理の学際的研究 接触場面の言語管理研究 vol.6 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 198 pp.13-28
- 金美善 (2003). 混じり合う言葉—在日コリアン一世の混用コードについて 月刊言語 6 pp.46-52 大修館書店
- 木村直美 (2009). 長期滞日中国人に見られる助詞『に』『で』『を』の誤用分析—インタビューとブログからの談話分析 山口大学日本語教育論集 山口大学日本語教育研究会
- 金由那 (2006). 日本における韓国語学習者の学習目的と学習意識 真田真治(監修) 任榮哲(編) 韓国人による日本社会言語学研究 pp.223-243 おうふう
- 高民定 (2014). 日本の韓国人移民の言語習慣に向かう評価—語りに見られる言語習慣の通時的管理との関わりから— 村岡英裕(編) 接触場面における言語使用と言語態度 接触場面の言語管理研究 vol.11 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 第 278 集 pp.131-144
- 今千春 (2009). ネットワーク調査方法の再検討—外国人居住者のネットワーク調査から 村岡英裕(編)多文化接触場面の言語行動と言語管理 接触場面の言語管理研究 vol.7 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 第 218 集 pp.105-123
- 今千春 (2010). 日本の韓国人居住者のインタビュー場面における footing—「animator」の分析 村岡英裕(編) 接触場面の変容と言語管理 接触場面の言語管理研究 vol.8 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 第 228 集 pp. 61-78
- 今千春 (2011). 日本の韓国人居住者の外来性管理—通時的・共時的分析の試み 村岡英裕(編) 接触場面・参加者・相互行為—接触場面の言語管理研究 vol.9 千葉大学大学院人文社会

- 科学研究科研究プロジェクト報告書第 238 集 pp. 51-67
- 今千春 (2012). 韓国人居住者の接触場面に向かう言語管理—言語バイオグラフィーからの記述の試み 村岡英裕(編) 外来性に関わる通時性と共時性 千葉大学人文社会科学科学研究科研究プロジェクト報告書 Vol.248 pp.49-67
- 郭銀心 (2006). 韓国の帰国子女の言語生活—日本語と韓国語間のバイリンガリズムとコード・スイッチング 任榮哲(編) 韓国人による日本社会言語学研究 pp.201-222 おうふう
- 共同通信社取材班 (2011). ニッポンに生きる 在日外国人は今 pp.231-259 現代人文社
- 李協京,田淵五十生 (1997). 中国人の日本留学の百年—歴史的軌跡と現在の留学事情について 奈良教育大学紀要 46(1)(人文・社会) pp.21-35
- 莫邦富 (1993). 商欲 新華僑パワーのルーツ 日本経済新聞社
- 村岡英裕 (2002). 在日外国人の異文化インターアクションにおける調整行動とその規範に関する事例研究 接触場面における言語管理プロセスについて II 千葉大学大学院社会科学科学研究科研究プロジェクト報告書 38 pp.115-207
- 村岡英裕 (2010). 接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか: 類型論的アプローチについて 村岡英裕(編) 接触場面の変容と言語管理—接触場面の言語管理研究 8 人文社会科学科学研究科研究プロジェクト報告書 228 pp.47-59
- Hidehiro Muraoka, Sau Kuen Fan, Minjeong Ko (2013). Ethnographic analysis of evaluation diversity in language management: A methodological consideration for the study of migrants in societies of early globalization. 3rd International Language Management Symposium (Prague). September. 13-14 発表資料.
- 長井進 (1988). 外国人交換留学高校生の日本における適応過程 心理学研究 59 pp.37-44
- 中原洪二郎 (2003). 参政権と帰化をめぐる在日韓国人の意向, その類型化と構造の分析 社会心理学研究 19(2) pp.79-93
- ナカミズ・エレン (1997). 日本語におけるスタイル切り替えの習得段階 ブラジル人就労者の— 阪大日本語研究 9 pp.83-110
- 中野克彦 (2003). エスニック・ネットワークの新たな展開—在日中国人のネットワークとメディア 駒井洋 (監修) 石井由香(編著) 講座グローバル化する日本と移民問題第Ⅱ期第4巻 移民の居住と生活 pp.293-319 明石書店
- 生越直樹 (1991). 在日韓国・朝鮮人の言語生活 月刊言語 8 pp.43-47
- ナズキアン富美子 (2005). 終助詞「よ」「ね」と日本語教育 言語教育の新展開—牧野成一教授古稀記念論集 pp.167-180 ひつじ書房
- Nekvapil, J. (2003). Language biographies and the analysis of language situations: on the life of the German community in the Czech Republic. *International Journal of the Sociology of Language* 162. 63-83.
- Neustupný, J. V. (1985). Problems in Australian-Japanese contact situations. In J.B. Pride (Ed.) *Cross-cultural encounters: communication and miscommunication*. Melbourne: River Seine. pp.44-84.
- ネウストプニー.J.V. (1995). 日本語教育と言語管理 阪大日本語研究 7 pp.67-82.
- ネウストプニー.J.V. (1981). 外国人場面の研究と日本語教育 日本語教育 45 pp.30-40
- 野山広 (2013). 地域に定住する外国人の日本語会話能力と言語生活環境の実態に関する縦断的研究 独創・発展型共同研究プロジェクト: 定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究 pp.100-109

- 小田和彦 (2010). 日本に在留する中国人の歴史的変容 風詠社
- 岡崎敏雄, 一二三朋子 (1995). 多言語・多文化共生のパースペクティブに立つ日本語教育の枠組みと日本語教育における言語的共生化 教育学研究紀要 41 pp.450-455
- 奥田道大, 田嶋淳子 (1995). 新版池袋のアジア系外国人 回路を閉じた日本型都市でなく 明石書店
- 奥田道大, 鈴木久美子 (2001). エスノポリス・新宿/池袋—来日 10 年目のアジア系外国人調査記録 ハーベスト社
- 大久保孝治 (2009). ライフストーリー分析—質的調査入門 学文社
- 朴良順 (2006). 日本語・韓国語間のバイオリンがリズムとコード・スイッチング 韓国人による日本社会言語学研究 真田真治(監修) 任榮哲(編) pp.183-200 おうふう
- ロメイン, スーザン(著) 土田滋・高橋留美(訳). (1997). 社会のなかの言語—言語社会言語学入門 Language in Society An Introduction to Sociolinguistics by Suzanne Romaine 三省堂
- 真田真治 (2006). 社会言語学の展望 くろしお出版
- 真田真治, 陣内正敬, 渋谷勝己 (1992). 社会言語学 桜楓社
- 佐野香織 (2007). 地域社会に暮らす長期定住外国人の日本語使用実態 人間文化創成科学論叢 10 pp.25-33 御茶ノ水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
- 佐野香織 (2008). 地域社会に暮らす長期定住外国人の日本語使用実態: 発話データを通して (日中韓3か国合同ジョイントゼミ(北京) 大学院教育改革支援プログラム 日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成 活動報告書
- 塞漢卓娜 (2011). 国際移動時代の国際結婚—日本の農村に嫁いだ中国人女性 勁草書房
- 清ルミ (1998). 外国人社員と日本人社員—日本語によるコミュニケーションを阻むもの— 異文化コミュニケーション 10 pp.57-73 神田外語大学
- 渋谷勝己 (2010). 移民言語研究の潮流—日系人日本語変種の言語生態論的研究に向けて 待兼山論叢文化動態論篇 44 pp.1-23 大阪大学大学院文学研究科
- 渋谷勝己, 金美善 (1999). 在日コリアン一世の日本語中間言語における動詞文 第2言語としての日本語の習得に関する総合研究 科学研究費補助金研究成果報告書 pp.180-193
- 白畑知彦, 林茂則, 村野井仁 (2010). 詳説 第二言語習得研究—理論から研究法まで 研究社
- 白岩砂紀 (2003). エスニック・ビジネスに関する事例的研究 奥田道大(編著) 都市エスニシティの社会学 ミネルヴァ書房
- 田嶋淳子 (2010). 国際移住の社会学—東アジアのグローバル化を考える— 明石書店
- 高木耕 (2009). 日本在住外国人労働者に関する一考察—少子高齢化社会における人材確保という視点から 神田外語大学国際社会研究所(編) グローカリゼーション国際社会の新潮流 pp.234-243 神田外語大学出版局
- 田中真理 (1999). OPIにおける日本語ヴォイスの習得状況: 英語・韓国語・中国語話者の場合 第2言語としての日本語習得に関する総合研究 pp.335-350
- 谷口すみこ (1998). 絵の説明タスクの分析結果 就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得に関わる要因の多角的研究 平成 6~8 年度科学研究費補助金代表者: 土岐哲 pp.23-31
- 譚璐美・劉傑 (2008). 新華僑 老華僑 変容する日本の中国人社会 文芸春秋
- 辻本昌弘 (1998). 文化間移動によるエスニック・アイデンティティの変容過程: 南米日系移住地から日本への移民労働者の事例研究 社会心理学研究 14(1) pp.1-11
- 土岐哲 (1998). 就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得に関わる要因の多角

的研究 平成 6-8 年度科学研究費補助金

- 王氷菁 (2009). 日中接触場面の会話における人称詞の言語管理—中国人日本語学習者側を中心に— 村岡英裕(編) 千葉大学大学院人文社会科学研究プロジェクト報告書 第 218 集 多文化接触場面の言語行動と言語管理 接触場面の言語管理研究 7 pp.125-137
- 王曉泱, 周飛帆 (2006). 中国人在職者の友人ネットワークに関する調査研究 人文と教育 2 pp.31-49 千葉大学
- 王秀芳 (2009). 在日中国人留学生の言語使用における言語意識・言語能力の影響について 社会言語学 11(2) pp.83-91
- 王玉明 (2006). 接触場面における不一致への応答—中国人学習者と日本語母語話者の相違 村岡英裕(編) 多文化共生社会における言語管理—接触場面の言語管理研究 vol.4 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 129 pp.69-78
- 山下清海 (2010). 池袋チャイナタウン 洋泉社
- 山田京子 (2006). 中国語母語話者の終助詞「よ」の運用に関する問題点—「よ」と対応する中国語表現との対照研究から— 早稲田大学日本語教育研究 8 pp.125-135
- 楊昉 (2009). 意見の不一致における類型と調整ストラテジー—中国語母語場面と日中接触場面の事例分析 村岡英裕(編) 多文化接触場面の言語行動と言語管理—接触場面の言語管理研究 vol.7 千葉大学大学院人文社会科学研究科プロジェクト報告書 218 pp.65-85
- 楊昉 (2010). 日本語による不一致応答の社会的, 場面的要因の分析—中国人居住者の事例 村岡英裕(編) 接触場面の変容と言語管理 接触場面の言語管理研究 8 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 第 228 集 pp.95-114
- 楊虹 (2010). 中国人日本語学習者の終助詞の使用に関する一考察 お茶の水女子大学人文科学研究 6 pp.199-208
- 任榮哲 (1993). 在日・在米韓国人及び韓国人の言語生活の実態 くろしお出版
- 殷燕軍 (2005). 在日中国人のアイデンティティに関する一考察— 新華僑のメディアを中心に 自然人間社会 38 pp.17-36 関東学院大学経済学部教養学会
- 吉田智佳, 白畑知彦 (2013). 日本語学習者の習得調査: 滞在が 10 年を超える中国語を母語する日本語学習者の事例研究 外国語教育: 理論と実践 39 pp.95-107 天理大学言語教育研究センター
- 吉田忠則 (2009). 見えざる隣人—中国人と日本社会 日本経済新聞出版社
- 趙熾虹, 吳珺, 笠原祥士郎 (2004). 日本語中・上級中国人学習者を困らせる日本語の問題点に関する一考察 北陸大学紀要 28 pp.313-325
- 鄒曉依 (2012). 中国人居住者の外来性管理及び言語使用の実態—日本語の動詞使用を中心に 村岡英裕(編) 外来性に関わる通時性と共時性 接触場面の言語管理研究 vol.10 千葉大学大学院人文社会科学研究科プロジェクト報告書 248 pp.69-87
- 鄒曉依 (2014). 接触場面における動詞語彙の使用及び管理のバリエーション—中国人居住者の事例から 村岡英裕(編) 接触場面における言語使用と言語態度 接触場面の言語管理研究 vol.11 千葉大学大学院人文社会科学研究科プロジェクト報告書 278 pp.1-19.
- 鄒曉依 (2015). 長期滞在中国人の言語レパトリの研究—接触場面会話における日本語動詞使用と言語管理を中心に— 千葉大学大学院博士学位論文
- 法務省法務省在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表(表番号 14-06-01-2)
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001127507>(アクセス日: 2016.02.01)

¹ 法務省在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001127507>(表番号 14-06-01-2, アクセス日: 2016/2/1)

² 佐野(2007)が使用した Klein&Perdue(1992)の成人移民の第2言語発話発達段階である。佐野の紹介によると以下の3段階がある。

(1)名詞句構造(Nominal utterance organization) : NUO 簡潔で接続のない名詞並列, 形容詞, 助詞, 時に副詞で構成される。

(2)不定動詞構造(Infinite utterance organization) : IUO 動詞の出現による構成力が出てくるが, 不定詞, 定動詞の区別がない段階。

(3)定動詞構造(Finite utterance organization) : FUU 定動詞, 不定動詞の区別がある。動名詞・分詞などとの使い分けができる段階。